第２２５号

芥川だより

発行日＊２０２５年１０月１日　e-mail: ab_879686240yahoo. co. jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
発行 人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

独居老人が始まる

家内が亡くなってひと月が過ぎた。亡くなった朝から、見慣れた景色が違って、何か別の世界をみているような感じも徐々に薄らぎ平常に戻りつつある。これまでの生活とは違う生活が始まった。すべてを自分がしなければならない。周りにいる一人暮らしの老人を見てはいたが、自分がなるとは思いもしなかった。

確かに、乳がんの手術を終えた担当医が「余命は５年ぐらいかな」とは聞いていたが、こんなに早く亡くなるとは思いもしなかった。家内もそんな思いだったと思う。あらためて医者の見立ては凄いと思い返す。治療には少し不満も残るが、家内の体質が抗がん剤治療や放射線、最後は最新のホルモン注射などの効用を受け入れない特異なものだったと思えば致し方がないと考える。

葬儀も無事に終わり一段落したが、その後が意外といろいろな手続きに振り回される事になる。市役所には幾度も行った。次に困ったのは、相続の手続きである。私も歳なので早くしておこうと不動産の登記を知り合いの司法書士さんにお願いする。置かれている場所を掘り返し登記関係書類を探し出し、まとめて司法書士事務所に送る。足りない書類は、司法書士が取り寄せる形で進めてもらった。もうすぐ出来上がり法務局へ送られ登記完了となる予定である。

カードや預貯金の整理は、金の流れがわからないので少し時間をおいて始めたが、不明な引き落としのあるカードや年会費がいるカードは解約する。ETC カードも新たに私名義で作り、自動車保険も名義変更手続きをした。ドコモへ行き家内の携帯の解約､引き落とし先の変更手続きには 2 日もかかった｡もうこの歳だから D カードは解約。

一番心配したのは家内の死亡保険の手続きだった。昔に契約した保険会社は幾度も吸収合併されていたので、手続き書類が多く幾度も病院受付に行き保険会社の指定する診断書を書いてもらった。保険会社の営業担当も新人で、手間取ったが、保険金は無事に振り込まれた。次は、私の死亡保険の受取人を家内から子供たちへの変更手続きだ。

死をめぐるあれやこれ（１３０）

石川　吾郎

校正ということ

小生は、本紙が完成するに際して、最終的なチェックをする立場にあるのだが、一応記事を眺めわたして不具合がないかをチェックして、校正のまねごとをしている、と自分では思っていた。実際には、投稿者や編集者のみなさんが優れておられるので、校正的なことで、私のすることはそんなになくて、余ったスペースに花の写真なんかを添えたりするくらいのもので、あとは完成したファイルをネットにあげて、ホームページや目次のページを更新する、ということをするだけだ。◆ところが最近プロの校正者の方のお仕事に接する機会があり、ほとんど感動をしてしまった。つまり、原稿の著者の意図を正確に読み取り､用語の誤りや不統一を指摘していただいたり､場合によっては変更の提案もしていただいたりする。これぞプロの仕事、というものを見せていただいた。◆そこで感じた。人生にもこんなプロの校正者のような方がいたらよかったのにと。こんな方が近くにいてくれたら、たぶんこれまでの自分が犯した過ちの半分以上は事前に訂正ができて後悔することも断然減っていただろうに、と。◆ただやっぱりそんなうまい話は、人生にはないだろうと思い直す。コツコツと真面目に、本紙の小さなミスを根気よく見つけて訂正していこうと、反省したことだった。

芥川だより二二五号　目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム１３０	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳　１３９	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談　８８	祖蔵哲	2
ボケ老人の雑話　１８	明石幸次郎	5
オクラの山たより　１０９	因了生	6
隠された歴史　８４	満田正賢	8
俳句	影山武司	10
編集後記	ＳＫ生	10
ふみの道草　８８	山椒魚	11

これは「芥川だより」の読者の皆さんにも、是非ぜひお伝えしたいと思った。

さて、表題について朝日新聞は言う。

「朝日歌壇に寄せられた、選には漏れたもののユーモアあふれる秀歌を年に1度紹介する「番外地」。十七回目となる今年の筆者は春から選者を務める川野里子さんです」。

実は、川野さんは大分県出身とのことで、偶然見つけた記事を読んだ次第であるが、取り上げた歌の面白いこと。今では、川柳界でもこうした笑いはまれになった。

それぞれの歌に川野さんの百字程度の評があるがそれは略。歌を読んで皆さんならどんな評をするか。では、挑戦を。

啄木をブタギと読みて嗤われし吾も年老いてじっと手を見る　清水　基義

「生(い)きくらげ」こりゃまたなんとよく見れば「生(なま)きくらげ」が売られています　太田千鶴子

「新聞を取っていない人がいるそうね。天ぷらはどうするのかしら」と叔母　上田　結香

新札はつばめのように飛んでゆくアスリートだったか渋沢栄一　斉藤　哲哉

店員に一生ものと勧められ九十三の義母涙ぐむ　山本海絵子

父親はよく自らの病名をキーパーソンと自慢していた　脇本　俊雄

張り紙に「手のひらほどのクサガメが逃げました。めちゃくちゃ無口です」　佐々木ひろみち

選にもれ捨てられてゆく歌たちに供養塔などないのだろうなあ　松井　徹朗

母さんが「暇な人ら」と言っていた「朝日歌壇」にわたしもいるよ　高寺美穂子

まことに日々の暮らしにあふれるおかしさを歌って見事である。生きる哀しみがにじむ秀歌である。「番外地」で陽の目を見ているだけでは惜しい歌の数々。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

素老人☆よもだ帳（１３９）

坂本一光

◆朝日歌壇「番外地」をゆく

九月二十二日（月）付の朝日新聞に笑った。久しぶりに、怒りを忘れて笑った。

「哲学爺い」の時事放談（８８）

祖蔵　哲

ウヨクとサヨクの哲学

「日本もいよいよか」という事態が起こった。今年7月に行われた参議院選挙の大敗の責任をとるという形で先月9月8日、石破総理が辞任した。石破自身の責任でなく旧安倍派の裏金問題が敗因なのに。そして総裁選が22日から始まった。立候補メンバーは前回と同じような顔ぶれで、お互いに傷に触れないようなあいまいな形で選挙戦は進行した。予想は今度こそ小泉であった。しかし、今月4日の開票日に異変が起こった。高市総裁の選出である。もともと一般党員票は高市支持が多かった。冒頭の「いよいよ」とは、日本も西欧の政治の流れに呑まれて、「いよいよ右傾化してきた」という意味である。近年の参政党や保守党などの進出にみられるように「日本人ファースト」「伝統を守れ」など「右寄り」の言葉が国民に受けている。そして、彼らはリベラルな既成勢力を「サヨク」と言って反撃している。

どうもおかしい。ひと昔は左翼といえば「共産主義」、右翼といえば自由主義、保守主義も含めた「反共主義」であった。彼らは立場の違いがあれ「同じ土俵」の上で議論を戦わせ、急激な近代化による社会矛盾に対しては同調していた面もあ

った。そして双方に論理を持っていた。しかし、近年はお互いに「サヨク」「ウヨク」と呼び合い事実に基づかない事象に対して単なる感情的な揶揄や軽蔑の意味だけで対立している感がする。いつから双方は堕落し、なぜそうなったのか。そして今後、イデオロギーは何を目指すべきなのか。今月は「右翼と左翼」を哲学することで将来展望を見ていきたい。

（1） 右翼と左翼のはじまり

歴史教科書に従えば、右翼と左翼は、1789年フランス革命が勃発したのがきっかけで生まれた言葉と概念である。フランス革命は17世紀のイギリス名誉革命、18世紀末のアメリカ独立革命に次ぐブルジョワ市民革命である。

革命後、憲法制定国民議会が開催された際に従来の秩序を維持したいと主張する王党派・貴族派・国教派などの保守・穏健側が、議長席から見て会議場の右側に着座した。それに対して、従来の勢力を排除したいと考えて対立した共和・革新側が左側に着座したところから「右＝保守、左＝革新」という概念が生まれたのである。その当時はまだ立憲君主制であったが議会は機能していた。その後、フランスは急進派が政権を握り革命政権の国民会議はルイ16世の王権を停止し、公開処刑を行った。これ以後、フランスは王政を廃止し完全な共和制国家になったのである。

（2） 右翼と左翼の基本的対立軸「自由」

フランス革命以来の歴史的な右翼とは、先ほど説明した通り「保守主義」であり、急進的な改革に反対する「反動主義」である。そして歴史的左翼といえば「進歩主義」、ブルジョワ市民主義「自由主義リベラル」である。いずれも今日でいう「右翼と左翼」の定義の一部である。その理由が当時の対立軸が「個人の自由」に主軸を置いていたからである。保守主義者たちも含め国民は王権下であれ、宗教的権威下であれその下での自由はなかった。それが、市民革命により「解放」された。しかし、解放されたのはブルジョワだけである。資本を持たない労働者は取り残された。それどころか、18世紀末から起こった産業革命によって、いわゆる「資本主義」経済が飛躍的に発展し、それに伴って労働者はブルジョワジーという新たな支配階層によってさらに「自由」を奪われるようになった。

フランス革命から半世紀を過ぎ、資本主義労働の矛盾が顕在化し出したころで、1848年にマルクスとエンゲルスは「共産党宣言」を書いた。人類の歴史は、自由民と奴隷、領主と農奴、資本家と労働者などの、隠然または公然の階級闘争の歴史であるとされ、近代社会はブルジョワジーとプロレタリアートにますます分裂しつつあるとした。プロレタリアートは、自分の労働力を売って生活するしかない多くの弱者である。プロレタリアートがブルジョワジーから政治権力を奪取し、生産手段などの資本を社会全体の財産に変えることによって、社会の発展がすすむにつれて、階級対立も、諸階級の存在も、階級支配のための政治権力も消滅し、一人一人の自由な発展がすべての人の自由な発展の条件となるような理想的協同社会がおとずれるとした。これが「共産主義」である。この思想はすべての支配勢力にとっては脅威になる。

それ以後、右翼と左翼の「自由」の対立軸は資本の共有化という経済システムの問題となった。しかし、「共有化」という管理システムの問題は誰が管理するのかという「共同体」や「国家」の問題になり、結局、「政治形態」の問題になる。その結果「共産主義」はソビエトという権威主義による国家を作り出したが、自由を制限する統制が問題になり東西冷戦後事実的に消滅した。それ以後「自由」はあくまでも資本主義体制下での対立軸になって現在に至っている。現在のロシア、中国、北朝鮮でさえ「共産主義」国家ではない。経済システムは資本主義であり、政治的「権威主義」にすぎない。現在使われている「サヨク」という蔑称は冷戦時代に資本主義側から宣伝された共産主義の嫌悪イメージである。

なお、個人の自由軸で言うと、さらに左派的なのは「アナキズム」であろう。「無政府主義」と訳されるが、次節で説明する「国家」を否定する。一切の集団的権威を否定するので「個人的心情」と解釈されることが多く、勢力にはなりくい。

（3） 対立軸「国家」、「政治形態」

近代国民国家は1648年のウェストファリア条約によって確立されたとされる。それ以前は宗教上の権威である神聖ローマ帝国が地域や民族を乗り越えて広域に支配をしていた。この条約は、プロテスタントとカトリックの宗教的対立による三十年戦争の終結を目的とした講和条約であり、ヨーロッパに主権国家間の国際関係であるヴェストファーレン体制を確立した。いわゆる「封建体制」から「主権国家体制」への変更は主権が国民にあるという「国民民族自立」の運動でもあった。このように歴史的に言えば「国家主義」（ナショナリズム）はより自由を求める「左翼」ということになる。さらに「共産主義」における共有資産の国家管理も「国家主義」が左翼になる。現在では「国家主義」は「右翼」の代名詞であるはずが。

ここで問題なのは「国家」という概念である。「国家」という概念は王権神授説に変わる国家理念として、イギリスで17世紀ホッブズ、ロックらが「社会契約説」を説き、18世紀フランスのルソーによって人民が主権国家の主権者として位置づ

けられた。つまり、本来「国家」は個人の自由を守るために国民統合の総意として機能するためのいわば左翼の概念であった。「自由主義者」が「左翼」であり「国家主義者」でもあったのである。現在の「ウヨク・サヨク」との矛盾がある。さらに「共産主義」における共有資産の国家管理でも「国家主義」が左翼になる。「個人」「経済」など自由度の対立軸そのものの概念が変更されれば、「ウヨク・サヨク」の定義も変わるのである。

さて、政治形態における「民主主義」と「共和主義」からの対立軸の「自由」を見てみよう。「自由主義リベラリズム」の「自由」は国家からの非干渉という「消極的自由」であるのに対し、共和主義の「自由」は「政治参加の自由」であり、「自治の自由」とされるが、裏返せば「公共性」の実現を目的とする共和主義において「参政権」とは自治の自由、積極的自由を行使できる者のみに限られた権利と捉えられている。よって広く民主主義を推進する勢力は「リベラリズム」とされ、代議制度を中心とする積極的自由を実現する勢力を「共和主義」とされた。この対立軸では「左派」が「リベラル」、「右派」は「共和主義」になる。アメリカ議会における「民主党」と「共和党」もこの分類の流れになるのだろう。

このように「国家」「政治」における左右も個人の自由をどこまで拡大するかによって変化する。

（4）対立軸「経済」と「文化」

「東西冷戦後」の現在において、経済システムにおける自由とは、あくまでも「資本主義」での枠内になるが、その左右の対立軸はやはり「自由の濃度」になる。

前節で述べたように、資本主義の経済システムはその「自由」を保証するために国家を必要とした。特に国境を越えた経済圏の拡大には「国家」の力が必要であった。資本家は「国家」というバックボーンがあるからこそ「国家」を越えて経済が「グローバル化」できるのである。そしてその「自由度」の極が「リバタリアン」という「新自由主義」を生む。最大の自由を追求するのが「左派」だとすると、「リバタリアン」は左翼ということになる。その時のもう一つの軸が「文化」である。リバタリアンは経済的自由を求めて世界に進出する。そしてその時に異文化に遭遇するが、現在の異国はもう過去のような植民地として搾取できるような状況ではなくなっているので、その文化とは協調していく。つまり「文化的自由」も尊重するのである。グローバル企業というと搾取を目的で海外に進出する資本を連想するが、この「リバタリアン」は「文化的」な許容の自由を推進するという意味では「反保守主義」であり「左派」であるかもしれない。

そしてこの「グローバリズム」の課題は、貧困、気候変動、紛争、格差、感染症、人権問題など広範囲に存在する。これらの問題に「自由になる」、つまりこれらの問題から「解放される」ことがこの対立軸の「左翼」となる。その反対「右翼」とは「自国ファースト」の狭い自由である。トランプや参政党が右翼とされるのはこの点にある。

（5）左派「リベラル」の衰退

少し前までは盛んに世界進出を果たしてきたグローバル・リバタリアンは、いまや国家を越えて広がる範囲を失くしてしまっている。つまりグローバル地球はもう開発し尽くされたのだ。それに従い自国の経済状態も悪化している。その故に左派「リベラル」は衰退していく。だから右派が「自国第一」というのはわからないでもない。リベラリズムの自由とは「個人の利己心の発揮の自由」つまり経済的に豊かになるとか、自然の制約や自分を取り巻く共同体やその文化などの環境から解放される自由だ。経済進出が不自由になり、そして自国に戻るしかできなくなった人々はその帰属先を失っている。今更、古い共同体や文化には帰れない。リベラルは現在ばらばらになっているのだ。これがリベラル衰退の原因である。この経済的リベラル衰退の現象に従い、政治的、文化的リベラルの衰退も甚だしい。その隙間を狙って、参政党など右派政党がＳＮＳを駆使し、国民の不安を煽っている。「ポピュリズム」である。

（6）本来の「左翼と右翼」

左翼と右翼が対立してきた歴史は「経済」「政治」「社会」「文化」などの軸に対してその自由度をめぐるものであった。しかし、本来は「強者―弱者」を軸にすべきであろう。弱者を守り、育てるものが「左翼」であり強者の利益を代弁するものが「右翼」である。現在でも「右派」は経済における「トリクル理論」、つまり上層階の資本家が潤えば、その「おこぼれ」に預かり自分達も潤うと思い保守的制度に従っている。しかし、これでは奴隷状態のままであり排除される順位は変わらない。

自然界では放っておけば弱肉強食に進む。しかし、人間は知恵をもって自ら「弱い」立場を共に助け発展を遂げてきた。自分達だけが生き残るという戦略は結局、自然界では淘汰される歴史である。「左翼リベラル」はこの原点に戻り地道に進む道を固めなおす必要がある時を迎えているようだ。

～さて、日本のみならず世界の「右傾化」つまり「弱肉強食化」はどのような結果を生み出すのだろう。振り出し、つまり原始時代に戻るのか。

ボケ老人の雑記（その１８）

明石　幸次郎

先般の参議院選では日本人ファースト、外国人労働者の規制強化を掲げた参政党が14議席を獲得して国政政党となり、一定の存在感を持つようになりました。背景には１９９０年に１％未満であった外国人の人口比率が昨年は約３％（約３７７万人）に達し、１０％を超える市町村もあるという急速な日本社会の変化があります。今や製造業、介護、物流、工事現場、農業、漁業など人手不足の現場で多くの外国人が働いており、外国人なしでは回って行かない会社、地域もあって、地域経済に活力を与える一方で急激な変化に不安を覚える人も少なくない。この不安を覚える人達が参政党の躍進に繋がったようです。

この前、観光でパリ５日滞在して地下鉄、歩きで町を巡りましたが、移民人口が人口の１３％に達しており、５人に２人か３人はフランス人とは肌の色の違う人が歩いています。泊った安ホテルのスタッフは全員マグレブ（モロッコ、アルジェリア、チュニジア）かアフリカ系でした。

又、バス、タクシードライバー、町の清掃、ごみ集め、植栽、カフェ、ビストロの店員、公衆トイレの掃除、有料トイレの管理、スーパーの店員、土産物屋の店員、工事現場作業員などは、ほぼ、白人はいませんでした。テイクアウトした惣菜屋は移民の中国人夫婦がやっていました。

現地で感じたのは、日常生活の基礎を支える底辺の肉体的労働はほぼ移民が行っていることです。尤も全ての移民が肉体的労働で生活している訳ではなく、２３代目大統領のサルコジの父親はハンガリーから来た、母親はギリシャ系ユダヤ人であり所謂移民の子であります。色んな分野で成功した人達が多くいて、能力、チャンスがあれば、上昇出来うる社会ではあるようです。

日常的に多くのアフリカ系、アラブ系、マグレブ系、アジア系、東ヨーロッパ系移民を含む外国人が居て、接しているのは、日本との違いを多いに感じます。

パリに１８年住んで、フランス人と結婚している女性にガイドをしてもらったので「移民、外国人に対する偏見、軋轢などがあるのか」を聞きました。まず、人種によって住んでいる地区が違い、住み分けがなされているようで、人種が混在する地区でも表面的には上手く共存しているようで、学校教育でも差別、偏見をなくすことに力を入れている。又、貧しい移民の多い治安の悪い地区には立ち入らないようにしている。自分もアジア人と見られ差別的な態度、言葉を投げかけられたことがある。しかし仕事上ではお互い人種の違い、文化の違いを認めて接しているので、日本人だからといった差別はされないとのことで、日常的に相手が“なに人か”という意識は持たなくなっているし、パリに住んでいる人は殆どそうなのではないですかと言っていました。

よく言われるのは、外国人に対する偏見の緩和に重要なのが「接触の質」といわれ、移民と同じ地域に住むだけでは偏見は減らず、時には摩擦が強まるが、他方、職場や地域活動などで協働し、共通の目標を共有する前向きな接触があれば文化的反発は和らぐと言われています。アメリカの研究でアラブ系移民と長期接触した地域ではイスラムへの知識や、接触頻度が増え、偏見が弱まったと報告されています。日本の調査でも市区町村単位のデータから、外国人の比率が上昇すると排外感情が強まるが、１０％を超えると逆に寛容さが増える傾向があることを実証しています。接触が彼女ように日常化すると外国人、移民に対する脅威感が和らぎ、共生意識が高まるもので、これは日本でも示されています。

これからの日本は少子化、高齢化により労働力不足がより深刻になり、第一産業の農業、漁業においても、第二産業の工業、第三次産業のサービス業、介護福祉においても外国人に働いて貰わないと生存、生産、社会が維持できなくなることはすでに明らかになりつつあります。

それを分かっていながら、国は中途半端な外国人研修生制度を作り、安い労働力を得る為だけ（研修生の人権無視）を目的にした制度を維持継続し、外国人労働者を増やそうとしています。国連の人権委員会から奴隷制的と非難されているこの制度を改め、しっかりとした日本語能力も身につけさせ、職業訓練、職業選択の自由も与えて、家族も呼び寄せられる制度にしないと、現制度では研修生が劣悪な労働環境から逃亡し、不法滞在となり犯罪に走るような問題も生じています。

これからは、外人人が労働者として日本に定着して、日本社会に共生して初めて国力維持、向上に繋がる方向でやらないと、やたら外国人を排斥、規制することが日本人の利益に繋がるような短絡的な考えでは、これからの日本は成り立っていかないと思います。

問題も多くあるようですが、フランスのようにとまでいかないレベルで、移民を受け入れるべきだと思ったしだいです。

オクラの山たより（１０９）

困了生

一

一八九三（明治二十六）年十月二十五日、平田禿木（ひらたとうぼく）が龍泉寺の一葉宅を訪れ「来月の『文学界』に必ず寄書なすべき」と一葉に語り、一葉もこれを承知します。このとき禿木は二十歳。まだ高等中学（後の旧制第一高等学校）の学生でした。

禿木は本名平田喜一といい日本橋伊勢町の絵の具商の息子でした。この日の来訪は三月十一日以来の二度目でした。三月に来た時の用件は一葉が寄稿した「雪の日」は「文学界」の二号に掲載されるはずだったが三号になったということを告げるということでした。一葉は禿木の第一印象を「物がたり少しするに言葉多からず、うちしめりて心ふかげなれど、さりとて人がらの愛嬌あり、なつかしき様したり（少し話したが、言葉は多くなく、しんみりとして落ち着いているが、とはいえ人柄には愛嬌があり、懐かしい感じがした）」と日記に記しています。

一葉はこのとき禿木が「文学界」の同人で同氏の創刊号に掲載されていた「吉田兼好」の筆者であることを知りませんでした。早くに父と兄を亡くした境遇など一葉と共通するところがあり、話は弾んだようです。話題は次から次へと移って、現代の文壇の状況から、芭蕉や兼好、そして西行に、さらには幸田露伴にまで及びました。禿木は午後いっぱい一葉宅にいて日暮れになってやっと辞去しました。その夜、彼は一葉に「願はくばこの上とも深く交じらはせ給ふ」ことを許してください、手紙を書き送っています。

しかし、前号で書いたように、その後、一葉は小説家として一家の家計を支えていくことからいったん離れます。一家は龍泉寺町に転居して荒物駄菓子屋店を出し、一葉は五厘、六厘といった商売に追われる暮らしに追われて一時期文学からは縁遠い生活を送ることになります。

それでも樋口家が商売を始めて三カ月後の十月ごろには一葉は図書館通いを再開しました。一葉の気持ちはまた文学の方へと傾いたのでした。ちょうどそうした時期に樋口家を訪ねてきたのが、平田禿木。「文学界」への寄稿を承諾した一葉が、前作「雪の日」以来九カ月ぶりに「文学界」十二号（明治26、12）に発表した作品が「琴の音」です。

一葉が明治二十五年十一月に発表されたドストエフスキーの「罪と罰」（内田魯庵が英語訳から翻訳した）を読んでいたかどうかの議論はありますが、まず、一葉は直接的に西欧の文学の影響を受けたこともなく、また、キリスト教の世界に理解を示したことも一生を通じてありませんでした。しかし、「琴の音」には「文学界」を媒介として触れることができた西洋的なロマンチシズムや芸術至上主義と一葉の文学的な教養のベースにある日本古典世界（それは一葉の初期作品にしばしば見られた世界です）との融合がみられるというのが多くの研究者の語るところです。それはその通りですが、以下、もう少し詳しく「琴の音」の世界を検討をし、さらに「琴の音」とほとんど連続して書かれた「花ごもり」にも触れていこうと思います。

二

「琴の音」は一人の少年の魂の浄化と再生の物語です。十四歳の少年渡辺金吾の境遇は哀れでした。彼が四歳のときに母親は実家に引き戻され、あとは意気地なく酒におぼれて暮らす父親と放浪の生活を送ったのでした。十歳のときにはその父親も酔っぱらって死に、以後、人々にも見捨てられ、偏見の中で一人生きてきた金吾は、将来はとんでもない悪党になるに違いないと噂されているあいだに、本当に心がねじくれた少年になってしまいました。十一月のある秋雨の夜、根岸のあたりで美しい琴の音色に耳を澄ませます。それは一人でわび住まいをしている美しい女性森江しづが奏でる琴の音でした。月の光に澄み通るような琴の音にひたるうちに、いつしか金吾のすさんだ心は浄化され、自分を捨てた悪魔とも思った母親への懐かしさまでも沸きあがり、金吾はこの世が捨てがたいものだということを悟ります。こうして彼は更生し「百科爛漫の世」に出ていったのです。

優れた芸術の力によって魂が浄化され人間の再生がなされていくというテーマが出されているあまり、十九歳の女性である森江しづの人物像は希薄で現実性も感じられません。確かにこうしたことから見ると多くの研究者の言う通り感傷的でドラマ性に乏しく小説の形をなしていない失敗作であるとはいえます。

しかし、澄み渡った琴の音とどこまでも冴え返った月の光のなかで一人の少年の再生が語られている作品の結びにある文章はくだくだしい批評の言葉を超越して読む人に大きな感動を与えてくれます。

……金吾は今さら此の世の捨てがたきを悟りぬ。月はいよいよ冴ゆる夜の垣の菊の香たもとに満ちて、吹くや夜あらしの心の雲を払へば、又かきたつる琴のねの、あはれ百年の悶へをや残すらん、金吾はこれより百花爛漫の世にいでぬ。

「生きる」という実感、人の「世に」出るという実感、いいかえれば「生」の実感を金吾は「琴の音」という目に見えぬものから得ることができました。もちろ

ん、森江しづは金吾の存在を意識して琴を奏したわけではありません。ただただ自分が思う美へと向かおうとする心に従い「塵の浮世の紛雑（みだれ）」に左右されず「余念」なくしづは琴を奏でています。「澄みのぼる琴の音どこまでゆくらん、うつくしく面白く、清く尊く、さながら天上の楽」にも似たそれはしづの意思をはるかに超えて一人の人間を迷妄の闇から救い出し新たな生を授けたといえます。芸術を通しての感化を書こうとした作品。「琴の音」は文学という芸術、一葉自身が行っている作業の存在意義を自らしっかりととらえることのできた一葉の宣言ともいえそうです。「琴の音」執筆よりも少し時期は下がりますが、一葉の昂揚した気分は「塵之中日記」（明治二十七年三月十四日～十九日）の末尾の後に記された次の断片的な文章からもうかがわれます。

我れは人の世に痛苦と失望とを慰めんために生まれ来つる詩の神の子なり。をごれる者を抑へ悩める者を救ふべきは我がつとめなり。されば四六時中いづれの時かうち休みつつあらんや。我が血をもりし此の袋の破れざる限り、この美を残すべく、しかして此の世の滅びざる限り我が詩は人の命となりぬべきなり。

左の文中の「詩の神の子」という語は、おそらく「文学界」または北村透谷らの浪漫主義文学者の文章の影響でしょう。それにしても高ぶった言葉だ、一葉の普段とは全く異なったものだ、と感じざるを得ない文章です。

なぜ、このような彼女の平常の言葉から浮き上がった印象を与える言葉を記したのか。龍泉寺町の荒物駄菓子屋の奥の部屋で書物を読み文章を書き綴っている自分が普段用いている言葉とは異質なものを選ぶことで、一葉は「書くこと」に対する自らの意思を、気高く清らかなるものであると示そうとしたのではないか、とは一葉研究者の菅聡子さんの見解です。

三

いま話題にしている「琴の音」が注目される点についてもう少し述べてみます。

「琴の音」は「上」と「下」二部からなりっています。「上」では十四歳の孤児渡部金吾が悪の道に踏み込んでいくまでの経緯が語られています。注目されるのは最底辺の人々の生活、また貧乏ゆえに心までも貧しくなっていく人々の心理を無理なく写実的に描いているのは一葉の小説にはこれまでになかったことです。このリアルさは龍泉寺町での生活で社会のどん底で生きる人々とともにくらし素裸の生活をじかに目にした体験から生まれてきたのでしょう。金吾四歳のときに起きた夫の素行の悪さから妻の実家が無理やり夫婦を別れさせるという事件は当時ふつうにあったことで、「上」の内容をよりリアルなものとしています。

「下」は金吾が芸術にひたむきに打ち込む女性森江しづ琴の音に心を浄化され再生する経緯が語られているのですが、「上」に比べかなり観念的な内容というべきで一葉の初期作品とつながる要素が多いと思えます。この一人住まいのしづについてはまったく生活の匂いがしません。つまり生きている人間としてきちん造形されていないのです。私の勝手な思いですが、このしづは作者一葉の精神的な自画像といってよいでしょう。この観念的な形象は先ほどの一葉の高揚感がまだまだ抽象的で地に着いたものとなっていないことの証左かもしれません。

社会小説の要素もあるとされる一葉の後期作品につながる要素を持つ「上」とまだまだ観念的な世界を持ち初期の作品の要素を持つ「下」という二つの部分から成る「琴の音」は初期の部分と後期の部分とが合体した作品といえ、後期の作品群へとつながっていく分岐点となる作品の一つといえそうです。

四

ここで「琴の音」のすぐあとで書かれた作品を紹介します。「琴の音」に続いて一葉は「花ごもり」を「文学界」（明治27年2月と4月）に二回に分けて発表しました。以下、「花ごもり」の内容のあらましです。

瀬川与之助（二十三歳）は法学校を卒業したあと、やがては判事試験に合格することを願いつつ出身校の出版部に勤め、わずかばかりの収入がありました。彼は本郷の家で母のお近と父方の従姉妹お新と三人で平凡に暮らしていて、はっきりとした約束はないのですが、ゆくゆくは他に身よりのないお新（十八歳）と結婚して今のまま三人での生活を続けるつもりでした。しかし、ある日のこと。与之助のところに某省次官の娘との縁談が来ます。母のお近はこの縁談を積極的に進めようとし、それを成就するためにはお新を与之助から引き離すこともためらいません。与之助はお新の気持ちをくんでいったんは拒否しますが、相手の女性が彼のことを気に入ったこともあり、グズグズとしているうちに縁談を承知することになってしまいます。お新はお近に奉公を勧められ、華族の奥勤めか甲斐の山里に住む画家の話し相手となるかの選択を迫られます。うすうす事情を察知していたお新は自ら進んで画家夫婦行きを希望します。絵を習って恋しい時には与之助の姿を描いて心を慰めると与之助に伝えます。与之助はそれを聞いて心の中で泣くばかりでした。

この「花ごもり」という作品の中で男

性をしのぐ女の打算と野心とが生き生きと精細有る形で表現されているのは、何といっても母親のお近です。今のままの生活を続ければ、平凡ではありますが、優しく気心の知れたお新を嫁として幸福な日々を送れることをお近はよく知っています。しかし、瀬川の家を息子の与之助の代で世に出すことを成し遂げたいという気持ちをお近は抑えることはできません。作品の中で我が子の与之助に向かって「汝ほどの学識は広き東京に掃くほどにて、塵塚の隅にもごろごろとあるべし」、だから自力で出世しようなどということはまず無理だ、妻の実家の力を後ろ盾にして出世してどこが悪い、どこが恥ずかしい、と説くお近の理屈は現実的で、ふらふらとしている与之助のお新への思いなどは吹き飛ばしてしまう強さがあります。お近は自分の野心のためには与之助に対して自分の野心実現のための手段と考え、彼のお新へのおもいなど屁とも思いません。よく言えば誠に強い意志を持った女性としてお近は描かれています。また、初期の作品と同じく与之助とお新の恋は成立していませんが、初期の作品とは違い、自らの意志で恋を断念し甲斐の国へと旅立つお新の生き方には感傷的にならず一種のさわやかさが感じられます。強烈な野心と強い意志を持った女性であるお近、そして、自らの生を自ら選んで行動できるお新。二人とも現実的な世界に生きる女性として描かれています。

このように現実的な世界を描いた「花ごもり」に対して「琴の音」はまことに浪漫的といえるのですが、この対極的ともいえる作品がほとんど同時期に書かれたことはきわめて面白いことです。いったんは文学から離れ一葉自身が「塵の中」といった龍泉寺町で送った荒物駄菓子屋の日々のなかで一葉は自分の作家としての仕事を人の魂を浄化する聖なるものとして考えると同時に世の現実を冷静に見つめる視線を得ていったということができるようです。

なお、「花ごもり」のお新の生き方には半井桃水とも許嫁であった渋谷三郎とも結ばれず孤独な生を選ばざるを得なかった一葉に共通するものがあり、お新にとっても絵は一葉にとっての小説や日記であるという研究者の指摘もあります。いささか作品世界と作者の生き方とを近づけすぎではないか、とは思いますが気にはなります。

五

一八九三（明治二十六）年の十二月二十八日に「文学界」の発行人星野天知から「琴の音」の原稿料一円五十銭（三万五千円ほど）を一葉は受け取っています。この年の年末は多くの客が押し寄せ大晦日も元日も店は多忙を極めました。しかし、その繁盛ぶりも松の内までした。一月七日に通りの向かいに「野沢」という同業の店が開き、そちらに客を奪われるようになったのです。そのため店は少し暇となって「文学界」のために「花ごもり」の執筆に取りかかることができるようになりました。

「花ごもり」の原稿を平田禿木に送ったのは二月二十日のことでした。二十六日にはその原稿料が送られてきました。四円（九万円ほど）です。これでは客足の減った店の経営不振の穴埋めにはなりません。樋口家の家計は切迫してきました。

年始回りをかねてあちこちに借金を頼みに行ったとき、まともな着物はすべて質屋の蔵に入っていたため、妹の邦子が背中と前袖と襟を剥ぎ合わせて上から羽織を着れば剥ぎ合わせたものと見えない小袖を一つ作ってくれました。これを着て出かけたのですが、風が吹くたびにめくれあがってつぎはぎが見えないかと気が揉めたと一葉は日記（明治27年2月2日）に書いています。

妹が作ってくれた小袖を着て吹き付ける風を気にしつつ借金のために出かけたこの時期に「一葉の危機」という時期が同時に始まっていました。それについては次回述べることにします。

隠された歴史（８４）

満田　正賢

前回は、百済三書の一つである「百済記」が引用された日本書紀の巻のうち、神功紀に記された朝鮮半島記事を分析しました。今回は、応神紀に記された朝鮮半島記事を分析し、その中に隠された歴史を探ると共に、神功紀・応神紀に引用された「百済記」とその中に出てくる「貴国」について考えていきます。

応神紀に掲載された朝鮮半島記事のうち、八年条、二十五年条と十四年条、十五年条、十六年条は性格が異なります。八年条、二十五年条の物語部分は百済記の引用のみで構成されているのに対して、十四年条、十五年条、十六年条には百済記の引用がありません。

まず、十四年条・十五年条・十六年条の記事です。応神十四年条には、葛城襲津彦を新羅に派遣したという記事が出てきます。神功六十二年条では、姓が記されていない「襲津彦」という人物が記されており、この人物は百済記の沙至比跪（さちひこ）のことであると紹介されています。すなわち神功六十二年条では「襲津彦」が何者かはわかっていません。一方で、応神十四年条では大和朝廷の臣下である葛城襲津彦と紹介されています。ここにこの記事が創作されたものである

可能性が見て取れます。十五年条は東漢（やまとのあや）氏の祖先である阿直伎（あちき）が百済王の命で良馬を携えて来日した話です。十六年条は、葛城襲津彦を新羅から解放して帰国させるため、平群木菟（へぐりのつく）宿禰と的戸田（いくはのとだ）宿禰を加羅に派遣する記事ですが、王仁（わに）の来日記事に続く記事であり、襲津彦が「弓月の人夫」を率いて帰って来たと記されています。この一連の記事は東漢氏(始祖は阿直伎)、西漢（かわちのあや）氏（始祖は王仁）、秦氏（始祖は弓月の君）のそれぞれの祖先にまつわる伝承をもとに膨らませた記事ではないでしょうか。なお、『枚方歴史フォーラム検証―古代日本と百済』によれば、王仁は百済の人物ではなく、栄山江流域（馬韓）地域の人物である可能性が高いとされています。

八年条の百済記引用記事は次のとおりです。

「百済の直支（とき）王が薨じた。子の久爾辛（くにしん）が立って王となった。王は年が幼かった。木満致（もくまんち）が国政を執行した。王母とあい通じて、無礼な行いが多かった。天皇はそれを聞き、召し出した。百済記はいう。木満致は木羅斤資（もくらこんし）が新羅を討ったときその国の婦をめとって生んだのである。その父の功によって任那を専轄した。我が国（百済）に来て貴国と往還した。貴国の天朝の制命を承けて、我が国の政治を執行した。権は重く（国王のように）国政をみた。しかし天朝はその横暴を聞いて召喚した、と。」

この二つの百済記引用記事の内容は、神功六十二年の百済記引用記事と関連しています。すなわち、「天皇」が新羅を討つために加羅に派遣した木羅斤資が新羅（加羅？）の婦をめとり、生まれた子である木満致が任那を専轄し、貴国の天朝の命を受けて百済の政治を執行したが、天朝が木満致の横暴を聞いて、召喚した、という物語です。

この物語は百済記の引用とは言いながら、多少の修正を加えられている可能性が高いものです。なぜならば、神功六十二年記事には「天皇」、応神二十五年記事には「天朝」という表現が使われているからです。この記事の編者は「貴国」を「倭国＝日本＝大和朝廷」として意識していることがわかります。田中俊明氏は、神功四十九年条の「木羅斤資は百済の将である。」という分注を根拠に、百済の所業を倭の所業に置き換えていると見做していますが、百済記の記述が百済自身の所業を記述したものだったならば、なぜそれを、大和朝廷を想定した「貴国」の所業として百済記を改ざんし日本書紀に載せる必要があったのでしょうか。私は、この百済記の記事は、やはり謎の「貴国」の所業を記したものだと考えます。

ここから神功紀、応神紀の朝鮮半島記事の全体を通じた考察に入ります。

神功紀・摂政前紀の記述は明らかに、「三韓の王がこの時から日本の臣下となり日本に朝貢してきた」という歴史を創作しただけの、神話に近い創作です。

神功四十六年条から六十二年条までの朝鮮半島記事は、三国志魏志倭人伝の記述を大和朝廷の歴史と理解した上で、百済記の「貴国」を大和朝廷と解釈して、歴史を創作したものと考えられます。又応神十四年条・十五年条・十六年条の記事は、東漢氏、西漢氏と秦氏に残る伝承をもとに大和朝廷の歴史を創作したものと考えます。

百済記に記された「貴国」の真実を探る為に注目すべき記事は、神功六十二年条の「天皇は大いに怒り、すぐさま木羅斤資（もくらこんし）を派遣して、軍勢を領いて加羅に来集し、その社稷（しゃしょく）（国家）を回復した。」という記述、応神八年条の「貴国は枕弥多禮（とむたれ・済州島）および峴南（けんなん）、支侵（ししん）、谷那（こくな）、東韓の地を奪った。」という記述、さらには応神二十五年条の「天皇」が新羅を討つために加羅に派遣した木羅斤資が新羅（加羅？）の婦をめとり、生まれた子である木満致が任那を専轄し、貴国の天朝の命を受けて百済の政治を執行したが、天朝が木満致の横暴を聞いて、召喚した」という百済記の引用記事です。

峴南（けんなん）、支侵（ししん）、谷那（こくな）、東韓の地について、日本古典文学大系「日本書紀」の注釈は、「四者を並列に読む説と東韓を前三者の総称とみる説がある」とし、後者の説では、応神十六年条の「東韓者、甘羅城・高難城・爾林城是也。」という分注に注目し、峴南＝甘羅城＝全羅北道咸悦、支侵＝爾林城＝忠清南道大興又は全羅北道金堤郡利城、谷那＝高難城＝全羅南道谷那に当てる説を紹介しています。

前者の説としては、ネットに掲載されている shiroi-Shakunage 氏の「峴南を忠南大徳郡鎮岑面（忠清南道）、支侵を全北南原郡山東面（全羅北道）、谷那を全南谷城郡谷城面（全羅南道北東部）、東韓を、秋風嶺をまたいで絡東江中流域から錦江上流域へつながる地域（忠清北道・忠清南道）、とする説があります。

又後者の説では、朴淳發氏（忠南大学校百済研究所長）の、「応神紀八年、十六

年条に記された「東韓」は任実・南原・谷城（コクソン）など蟾津江（ソムジンガン）上流の全羅道内陸地域を指しているのは明らか」という説があります。朴氏は、「東韓」は峴南、支侵、谷那を包含する地域であるという認識です。

私は、これらの地域は、百済中心地域（漢城・京畿道）と南の栄山江流域（全羅南道）との中間に位置する地域となると考えていましたが、当時の百済中心地域（漢城・京畿道）と東南の加羅諸国との間の地域、という解釈も可能です。

古田武彦氏は『失われた九州王朝』（朝日新聞社、1973年）において「貴国」は九州王朝のことであると考察しました。一方私は、「貴国」は独自の文化を持っていた栄山江流域地域である可能性もあるのではないかと考えています。「貴国」を九州王朝と見なした場合、百済が加羅諸国を倭国（九州王朝）の領土とした上で百済の領土を奪い取ったという解釈になります。しかし、「天皇は大いに怒り、すぐさま木羅斤資（もくらこんし）を派遣して、軍勢を領いて加羅に来集し、その社稷（しゃしょく）（国家）を回復した。」という百済記の記述を見る限りでは、「貴国」の「天皇」は加羅を独立した国と捉えており、矛盾が見られます。

木羅斤資については、神功四十九年条には「木羅斤資は百済の将である。」という分注がついていますが、この分注と「天皇が怒って木羅斤資を派遣し、軍勢を領いて加羅に来集する」という記述との間に矛盾があります。「貴国」の「天皇」は木羅斤資を自分の臣下として使っています。「貴国」が九州王朝である場合、百済の将である木羅斤資が個人的に九州王朝の臣下となり、九州王朝の王の命に従った、ということになります。木羅斤資が栄山江流域地域の人物であり、「貴国」が栄山江流域地域に存在した国であったとすると、六世紀前半に百済に吸収された地域の将を「百済の将」と呼んだ、という理解が可能になります。

日本書紀は、明らかに百済記に記された「貴国」を大和朝廷と見なして、神功紀・応神紀を編纂しています。そこには多くの改ざんや創作が見られます。前回紹介した田中俊明氏や金泰植氏はほとんどすべてが（後代の史実の挿入を含めた）創作であると見做していますが、その前提には、当時の倭国が大和政権を中心にした首長連合であるという想定があります。そのような想定では、倭国が朝鮮半島において一定の影響力を持っていたという見方が出てこないのは自然なことです。

当時の倭国が、朝鮮半島に近い北九州にあり集権国家を築いていた九州王朝を指しているという想定に立てば、好太王碑文や神功・応神紀の記述が一定の史実を描いていたという解釈は可能になります。九州王朝は三世紀の三国志東夷伝の頃から加羅と鉄の取引をしており、狗邪韓国（金官国＝狭義の任那）との強いつながりを持っていました。従って、誇張はされているものの、九州王朝が加羅諸国に関与していたことは史実と思われます。

しかし、百済記が記す「貴国」が何を指しているかについては、別に論じなくてはならなりません。「貴国」は百済記の引用部分から推測する必要があります。百済記が記す「貴国」が、古田武彦氏が考察したように九州王朝のことを指しているという見方は可能ですが、その為には、四～五世紀において、百済が加羅諸国を倭国（九州王朝）の領域と見なしていたという理解が必要となります。一方百済記の「貴国」が栄山江流域に存在した国であり、日本書紀はその「貴国」を大和朝廷であると理解して、百済記の記述を膨らませて神功紀、応神紀の朝鮮半島記事を創作したという理解も可能です。その為には四～五世紀の栄山江流域が単に文化的に百済と異なる地域であったという理解から一歩進んで、一つの独立した国として百済、加羅諸国、新羅と相対していたという理解が必要になります。これは今後の検討課題です。

俳句

影山　武司

キーを打つ掌で追ふ蚊の名残
含みある問ひにたぢろぐ秋の雷
口癖の語尾は「そやろう」法師蟬
鯛や湖面に残る日の欠片
秋蝶の翅ゆつくりと日を畳む
切り岸を茜に染めて秋夕焼
鶴首の白磁の花瓶秋気澄む
古備前の壺の居並び律の風
碁敵の自慢話や虫の秋
独り打つ碁石の音や星月夜

編集後記

SK生

▲マスコミをにぎわせた自民党総裁選が終わり総裁には高市早苗氏が選ばれた。新総裁は先の大戦について「反省なんかしておりません。求められるいわれもない」と堂々と公言した。新副総裁に至っては「セクハラ罪って罪はない」といい「ナチスの手口に学んだら」と言ってのけた。この先いったいどうなるのであろうか。▲フランスの詩人のいわく「我々は未来に後ずさりしながら入っていく」と。それならばいささか不格好ではあるが、お尻の方からそろそろと未来に進もうか、これはかつて歩んできた道ではないかと注意しながら。

連載 ふみの道草（88）　山椒魚

五七五を読む ― 十七音の響き方③

初日の出生きとし生ける物すべて　浜子

万物をあまねく照らす日のひかり。新しい年が明けた。そして、地の隅々あまねく水は行き渡る。地球をつくり、命を支える太陽と水。

万物の春待ち侘びる息づかい　惠子

命無きものと命に春間近。

向い風八十路の母が前に立つ　みつ子

人のため生きて自分を生きる母。

人生を綴くほどにわく句想　幸一郎

生きて来た心かたちにする一句。

好きだから許してしまうあっかんべェー　正彦

物思いの中ならやさしいワタシ。

春風にふかれた様な仮名の文字　ふみお

春風に句帳の文字も踊り出す。

誕生日来るたび忘れ行く記憶　修一

我が母は、死ぬことも忘れて母は百寿越え。

巳にならい脱皮を重ね一歩ずつ　いぶき

年明けた脱皮するには良い機会　洋治

そうだ、ザリガニもバッタも人も脱皮する。

決断に迷って仰ぐ寒の月　羊子

難問が解けて見上げる春北斗。

飛び乗った電車が逆に動き出す　和俊

宍道湖北岸を行く一畑電車は、一畑薬師の駅に入り、スイッチバックして出て行く。それを知らなかった私は、背中にあったはずの湖が目の前に見えてうろたえたことがある。

凡人に海と空とが大きすぎ　幹夫

人間には手に負えないものがある、と知るのは大事だと思う。今の世で人の手に負えないものを散文的に言えば、金（資本）、原子力（核エネルギー）、そして情報だろうか。

時を経て再会の場は丸くなる　敦

その後積み上げた時の中で、人は自分を磨き、何かを受け入れる器量を大きくする。

活かし合う十人十色出す個性　菊江

無骨だがコピーとならぬ一人芸　智晴

「みんな違ってみんないい」（金子みすゞ）。その上で、他と比べない私の色をどう出すか。

癖のない味が嬉しい塩むすび　笑美

塩むすびに限らない、真っ当で普通であることを越えるものはないのではないでしょうか。

新婚の孫には甘い唐辛子　江美子

どんな艱難辛苦も、二人なら越えられる。

仏壇に上げる花なくご飯置く　昭三郎

人は逝き遠くて近い人になる。一番近い自分の中にいるから、花を上げご飯を置く。合掌。

心持次第で丸く生きられる　春子

「考えを直せばふっと出る笑い」。松山で活躍した番傘同人・前田伍健の代表句です。

故里の山の初日に手を合す　忠

ふるさとの山に向かいていうことなし、と啄木。ふるさとの山はどうしてこれほど懐かしいのか。私も、ふるさとの山はとことん泣けと言う、と思ったことがあります。

野暮なんてもまれもまれるうちに粋みちる

不真面目でいい加減だという真面目、もあるけれど。粋になるまで一貫する野暮もいい。

ザクザクと落葉も鳴った里の冬　百子

踏みしめた落葉の鳴る音も今では遠い記憶。

老いるほど人間力が試される　幸子

「生きるってことは、自分の中の、死んで行くものを、くいとめるってこったよ。気を許しゃあ、すぐ魂も死んで行く。筋肉もほろんで行く。脳髄もおとろえる。何かを感じる力、人の不幸に涙を流す、なんてェ能力もおとろえちまう。それを、あの手この手をつかって、くいとめることよ。それが生きるってことよ」と、山崎努演じる父が昔別れた高校生の息子（鶴見辰吾）に語るドラマがあったことを思い出しました（山田太一脚本『早春スケッチブック』）。

考えてみれば怖いことです。